



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第2主日 A年(2023年3月5日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 12章1—4a節

第二朗読：テモテへの手紙二 1章8b—10節

福音朗読：マタイによる福音書 17章1—9節

これに聞け

へんよう 変容

四旬節第二主日は毎年、主のご変容の箇所が読まれます。受難に先だって、主イエス・キリストはご自分が誰であるのか、ご自分の本当のお姿を弟子たちに教えます。それは、十字架で弟子たちが迷ってしまわないようにとの配慮からだったのではないのでしょうか。

第一朗読に関してですが、『創世記』1—11章は、人類の歴史の始まりを伝えています。12章からはアブラム(アブラハム)に語られた神のことばが記され、神の救済の歴史がイスラエルの民の中に展開していく様子が伝えられます。特に今日の朗読の箇所は、聖書の中に記された重要な神からの約束となります。

朗読箇所の直前、11章27—32節ではアブラムが召命を受ける以前の経歴が述べられます。父親の「テラは……息子アブラムの妻である嫁サライを伴い、カルデアのウルを発ってカナン地に向かった。ハランに着いたとき、そこに住んだ。テラの生涯は二百五年であった。彼はハランで死んだ」(31—32節 フランシスコ会訳)とありますので、アブラムの一族は、チグリス・ユーフラテス川河口、ペルシャ湾に近いウルから、おそらくユーフラテス川をさかのぼるコースで地中海とヨルダン川・死海に挟まれたカナン地を目指しました。ちょうどユーフラテス川の源のあたりにあったハランの地に到着した時に父親のテラが死にます。

そこで朗読箇所の冒頭1節の「生まれ故郷、父の家を離れて」に注目してみましょう。直訳すると「あなたの地から、あなたの親族から、あなたの父の家から(離れて)」となるそうです。本文の「生まれ故郷」はヘブライ語でモーレデトですが、「生む」を表すヤーラドの派生語だそうです。生まれが一緒

という意味で「親族」^{りかい}とも理解できますし、誕生の地という意味で理解して「故郷」ととらえることもできます。興味深い^{きょうみぶか}のは語の配列^{はいれつ}です。「地」、「親族」、「父の家」と範囲^{はんい}が次第^{しだい}に狭められています。こうして「離れる」^{はな}ことが強調^{きょうちよう}されて、「あなたの地」から「わたしが示す地」^{しめ}(1節)に行くことが明らか^{あき}になります。つまりアブラムは、親族や父^{むす}に結ばれた自然的な共同体から離れて、神が目指す新しい共同体を作る場所へと出発することが求められているのです。

第二朗読を省いて、福音朗読に目を向けてみましょう。

今日の福音朗読の少し前から読んでみると、イエスさまが「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」(16章15節)と弟子たちに問いかけ、ペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」(16節)と答えました。その後一回目の受難の予告(21-28節)をしてから、六日後の高い山での出来事が今日の朗読箇所となります。イエスさまはご自分が神から愛された神の子であることを弟子たちに伝えようとしたのです。

7節に注目してみてください。「イエスは近づき……」とあります。『マタイによる福音書』では、多くの場合には人がイエスさまに畏敬の念を抱いて「近づく」ことになりますが、ここではイエスさまご自身が「近づき」ます。イエスさまが近づくのは次の箇所があります。イエスさまの復活後の場面です。「イエスは近寄って来て言われた。『わたしは天と地の一切の権能を授かっている』」(28章18節)。今日の福音朗読のご変容の時^{へんよう}には、イエスさまは「起きなさい。恐れることはない」(17章7節)と弟子たちを力づけ、励まし、「今見たことはだれにも話してはならない」(9節)と命じます。弟子たちが復活したイエスさまと出会う場面では「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け……わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28章19-20節)と約束します。

以上のように今日の朗読にある17章7節の箇所はイエスさまの復活の場面と類似しています。高い山でイエスの変容に直面した三人の弟子たちは、山を降りて、イエスさまと一緒に神の国の福音を宣べ伝えます(宣教)。同じように高い山で復活したイエスさまと出会った弟子たちは山を降りて、日常生活の中でイエスさまの出来事を宣べ伝える(宣教)のです。

説教：聞け

ペトロはどうして仮小屋を建てることを提案したのでしょうか。日常の世界を超えた永遠の世界に触れたペトロは、それを自分の手元に留めたいと願ったのでしょうか。それは「自分のもの」にしたかったからです。しかし、第二朗読にあるように、「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださいました」(2テモ1章9節)と考えるパウロは、自分は神から「呼び出された」と理解しているようです。第一朗読でのアブラムも同様でしょう。「わたしが示す地に行きなさい」(創12章1節)と呼びかけられて、「主の言葉に従って旅立った」(12章4a節)からです。このような生き方になるためには、「これに聞け」という呼びかけが必要となります。